

薬物依存 初犯で断つ

薬物事犯の高い再犯率が社会問題化する中、初犯者を対象に栃木県が4年前から独自に行っている「再乱用防止教育事業」が成果を上げている。無料の回復プログラムに申し込んだ約60人のうち6割以上が受講を継続。再び薬に溺れることなく暮らしている。初犯者向けの本格的な再犯防止教育は他に例がなく、専門家は「国は全国に広がるよう支援すべきだ」と指摘している。【江刺正憲】

栃木の回復プログラム成果

初犯の薬物事犯のほとんどは有罪になっても執行猶予が付き、社会に戻る。だが、法務省の2010年の統計では、覚せい剤取締法違反で検挙された人の再犯率は約60%に上っており、「摘発だけでなく依存症の教育も重要」という声が上がっている。

栃木県業務課は09年8月、厚生労働省の補助金を使って事業に着手。初犯者に概要を紹介したパンフレットを渡す

受講者は判決後、県の委託を受けた民間リハビリ施設「栃木タルク」のスタッフから1回1時間半ずつ10回の講義を受け、薬物への欲望を抑える方法などを具体的に学ぶ。受講後、アンケートで頭

義講など処対望欲

者な意識改善が認められれば、修了となるが、希望すればその後3年間は無料で講義を受け続けることができる。

県と県警によると、09～11年、薬物事犯による県内の検挙者は年間250～260人台で推移している。このうちプログラムの対象は外国人などをのぞく初犯者123人。受講申込者は年々増加し、12年10月末までに62人となった。62人のうち中断したのは再使用で検挙された4人を含む

全員経験者。分かってもらえ安心

回復プログラムはどのように行われているのか。現場を訪ねた。

午後7時半、20～30代の女性3人、男性1人が宇都宮市内の東市民活動センターに集まった。10回の講義のうち5回目。栃木タルクの栗坪千明代表(44)ら3人が、薬物を使っていると、さらに使おうという感情が強くなるため、思考のスイッチを切り替えることが大切だと教える内容だ。

使用するテキストは簡単な文章で書かれ、漢字には全て振り仮名が付いている。参加者が交代で内容を朗読した後、スタッフが前回までに学んだ薬物への思考を断ち切る方法をあらためて説明。

①電気スイッチを思い浮かべ、頭の中で切る②手首に巻いた輪ゴムをはじき「ため」と言う③息を深く吸い、吐き出すのを3回繰り返す④

誰かに電話して気持ちを話す。のうち、どれを選ぶか尋ねた。

女性2人は「親や彼氏に電話で気持ちを頻繁に伝える」と話し、もう一人の女性は「以前は輪ゴムで、最近は深呼吸かな」。男性は「僕も深呼吸。他に、携帯電話の待ち受け画面にしている子供の写真を見てイライラを解消する」と独自の対処法も披露した。スタッフは「気持ちを伝えられる人が何人もいるのは大切」と参加者に語りかけた。

「使いたい欲求がとても強い」と告白していた女性は終了後「本音を吐き出してかなり楽になった」と明かした。別の女性も「出席者全員が薬物の経験者なので、自分の苦しい気持ちを分かってもらえる安心感がある」と話した。